鈴鹿山麓混成博物館物語

日本武尊と大蛇の葛藤

山が生む水への祈りと暮らし

鈴鹿の山並、そして山麓を屋根の無い博物館に見立て、
その魅力を発信するシリーズです。
近江の東に連なる鈴鹿山地・伊吹山
これらの山々まで生まれた水は、無数の谷となり、
集まり川となり琵琶湖に集います。
鳥の目でこの水の流れを追えば、
まるで蛇の群れの蠢きのようにも見えることでしょう。
まさに蛇は水の神。
鈴鹿から伊吹にかけての山麓には、蛇と蛇を連想させる祈り文化が広がり、
何故かここに日本武尊と、その一族の姿が見え隠れします。
川の流れを利する者と、自然との間に葛藤があったのかも知れません。
この冊子では、蛇・日本武尊をキーワードに、
山で生まれた水に対する祈りと暮らしの諸相を追うことにします。

1章 伊吹山の大蛇

『日本書紀』に拠れば、伊吹の神に闘いを挑んだ日本武尊は、
白き大蛇の姿となって現れた伊吹の神にもろくも敗れ去り、その命を落とします。
白とは雪。大蛇とは水の神。
琵琶湖の水源を廻る、大和(日本武尊)と、
近江の葛藤の歴史を物語っているのかも知れません。

琵琶湖から仰ぐ伊吹山

1. 伊吹山と日本武尊

琵琶湖の北に聳える伊吹山は、標高こそさほど高くはありませんが、大量の雪を頂く山として知られています。この雪はやがて融け、川となり、湧水となり琵琶湖に流れ下ります。伊吹山は観念的な琵琶湖の水源と意識されていました。琵琶湖を手に入れるには、「水源の神を調伏しなければならない。」古代大和政権はその様に考えたのでしょうか。

伊吹の神に挑み、敗れ、命を落とした日本武尊の神話は、人の暮らしを支えるため、神の水を人の水に変えようとした、先人の苦闘の残映なのかも知れません。

伊吹山頂の日本武尊

ケカチの水

2. 伊吹から流れ出る水

伊吹山は古くから、山に依拠した仏教が根付き、伊吹山四ヶ寺に代表される寺院と、その行場が山中に広く展開し、国家的な祭祀がここで行われていました。伊吹山の修験には様々な要素がありますが、その信仰の中心となるのは、伊吹山が生み出す水に対する祈りであったと考えられます。山頂付近には、雨乞いの対象として崇められた「白龍さん」・「黒龍さん」が祀られる他、伊吹山修験の中心的役割を果たした三之宮神社からは、聖なる水として、山中で修された悔過行に由来する「ケカチ」の水が湧き出、祈りの対象となっています。

3. 不動の瀧

伊吹山は、ほぼ全山が石灰岩質の山で、水が浸透しやすく、山上で水を見ることは余りありません。しかし、少し下ると水がしみ出し、流となり大峡谷を作り出します。とりわけ、伊吹山四ヶ寺の一つ、太平寺に面する谷は深く、険しく、山岳修験の行場となっていました。この峡谷に懸かる瀧が「不動の瀧」です。

瀧は、山中で生まれた神の水が、人間界の水に生まれ変わる聖地として、神仏（多くの場合は不動明王）が祀られます。ここも例外ではなく、岩棚の上に瀧水を見護るように、石の不動明王が安置されています。

不動の瀧を見つめる不動明王

太平寺十一面観音

4. 龍女は仏になりにけり

水が生まれ、川となり、うねり流れる様は、容易に蛇と結びつき、蛇の神的な力を強調すればやがて龍に変じます。

伊吹山中の太平寺には、江戸時代の仏師、円空が刻んだ十一面観音が安置されていました。この仏は、太平寺集落が山を離れざるを得なくなった時、山の人達と共に里に降りてきました。像は2m余りの長身で、桜の霊木に刻まれています。十一面観音は仏教の尊格ですが、山の水を産む女神と習合した「神」でもあります。この像の衣文には鱗が刻まれ、その裾には鰭が表現されています。正に、伊吹の龍女の姿です。

5. 出雲井（いずもゆ）

伊吹山から流れ出る姉川の水は、広く長浜の平野までを灌漑しています。かつて、姉川には水を取るための堰が二十ヶ所以上も設けられ、上と下との間で水争いが頻発していました。ところが、昭和20年、ジェーン台風による大水は、これらの堰を悉く流し去ってしまいました。人々は話し合い、伊吹を護る伊夫岐神社の元に共同の堰を設け、ここから水を取り、様々な工夫をしながら、平等に水を分ける仕組みを作り上げました。これが「出雲井」です。台風の大水は、水を求め争う人の姿に怒った伊吹の神が、大蛇となり荒れ狂った姿なのかも知れません。

出雲井円形分水

2章 芹川の白き流れ

鈴鹿山地の北端に坐す霊仙の元から流れ出る川が芹川です。
白く輝く石灰岩が、清冽な流の美しさを際立たせます。
この、芹川の水を利することに源を発したのが、多賀大社と考えられます。
川の流れと、時の流れを遡りましょう。

芹川の流れ

1. 水が生まれる「口の権現」

白い川底の芹川峡谷。その際奥の集落が河内です。峡谷は更に霊仙に向かって延びますが、ここから先は神の世界。神の世界と人の世界の狭間に坐す神が「口の権現」です。

昼なお暗い川岸に群れる杉の巨木の前に鳥居が建ち、神の世界を標しています。そして神は巨木に囲まれた中に屹立する自然の磐。凄まじいオーラを発し、ここに端座しています。水を生み出す神の依り代なのでしょうか。そして、この神の程近くの山の端から、清冽な水が滾々と湧き出、流を造り芹川に合わさります。水の誕生とこれを見護る神の姿がここにあります。

口の権現

河内風穴入口

2. 山の胎内「河内の風穴」

芹川上流の河内。ここに鎮座する熊野神社の元に清冽な流れが降り、芹川に合流します。この水源が、近畿地方最大の鍾乳洞とされる「河内風穴」です。観光で人が入ることができるのはほんの入り口付近だけ。その奥がどこまで続いているのかはいまだに謎です。鈴鹿に降った雨が地に浸み、少しづつ石灰岩を溶かし今の姿を形成しました。鈴鹿の山を水を生み出す母なる山と形容するなら、まさしく母の胎内がこの洞穴。近隣では洞穴の鍾乳石をなでると母乳の出が良くなる、という信仰もあったようです。洞穴に母性を感じた素直な自然信仰の姿です。

3. 向之倉「井戸神社」

芹川左岸の斜面を上ったところにある集落が向之倉で、ここの鎮守として祀られているのが「井戸神社」です。神社の前には、目を見張るような桂の巨木が天を衝いて聳え立っています。滋賀県では最大級の桂の巨木です。そして、この根方には窪地があり、そこに水が湛えられ、この水が斜面を降ってゆくのが見えます。水の名を冠するこの神社は、芹川の源流の一つだったのです。伝説によれば、この池には蛇が住まい、池ざらえの時にはこの桂の木の中に姿を隠すのだそうです。水を司る神の姿が、ここでも蛇として表現されています。

井戸神社の桂

調宮神社と芹川用水

4. 水を配る多賀の神「調宮神社」（ととのみやじんじゃ）

天照大神の親神を祀る多賀大社。この神が最初に降り立ったのが、多賀の背後に聳える杉坂山の神木杉とされています。ここに暫く留まった神は、招かれて芹川の岸に降り、ここに社殿を構えます。これが調宮神社で、多賀大社の奥宮とされています。そして神は、さらに里に降り、多賀大社の杜に鎮座することになります。 この神の動きは、山で生まれた水が谷となり、川となり里を潤す水の旅と、シンクロします。この事を物語るように、調宮神社の横には堰が設けられ、ここから用水が引かれ、その一部は多賀大社の杜の中を流れています。

5. 青龍山と胡宮（このみや）神社

多賀の里を歩くと、多賀大社の杜の背後に標高は高くはありませんが、秀麗な青龍山の姿が目に入ります。そして、この山を神として祀る神社が胡宮神社です。「このみや」とは「こうのみや」で「高の宮」さらに「たかのみや」に繋がるという考えがあります。とするならば、青龍山を祀る胡宮神社こそが「多賀」の始まりということになります。青龍山に登ると、途中には決して枯れる事のない聖池と祀られる「御池」があり、さらに山頂付近には山名の由来ともなった「龍神」が宿る磐座が祀られています。ここにも、長き水神の姿があります。

青龍山

大瀬神社の龍

3章　犬上川と大蛇

日本武尊は伊吹山の大蛇との戦いに敗れました。
日本武尊の長男は、近江の姫との間に生まれた稲依別王（いなよりわけのおう）。
彼もまた大きな犠牲を払って大蛇と闘います。
その大蛇とは犬上川。

1. 金蓮寺「蛇石」

犬上川の流は川相で南谷と北谷に別れ、鈴鹿の山に至ります。南谷を遡ると大杉の集落に至り、ここで大杉川と合わさります。この集落の中に建つ寺院が「金蓮寺」で、その境内の片隅の、山水が流れ落ちる小さな滝の傍らに「蛇石」と呼ばれる奇石があります。

湖東流紋岩と呼ばれる変成岩をベースに、蛇がうねる様がリアルに浮き出ています。マグマが冷えて固まる際、角閃石等の有色鉱物が微妙な作用で蛇型になって現れたものである、とのこと。水の生まれる処に蛇の造形が現われる。正に、自然が生み出した奇蹟の造形と言えます。

金蓮寺蛇石

十二相神社

2. 巨人の杜「十二相神社（じゅうにそう）」

犬上川の北谷に面する、佐目の集落に鎮座するのが十二相神社です。祭神は海のかなたから渡り来た「少彦名命」。縁起に依れば、“昔、佐目の住人が大和の十津川を旅していると、川中に光明を放つ霊木があり「我を引き上げ佐目に連れ行け」と告げた。そこでこの霊木を迎え祀ったのが十二相神社である”。犬上川の岸に、川中から出現した神が祀られているのです。

社殿は、樹齢600年とも、1000年とも云われる杉の巨木に取り囲まれています。頭上から、痛いほど降り注がれる巨木の放つオーラが、自然の持つ力の偉大さを実感させます。

3. 犬上伝説

“昔、犬上川の上流に祟りをなす大蛇が棲み、人々を苦しめていた。日本武尊の長男である稲依別王は、愛犬小石丸を伴い、大蛇を退治するため川を遡った。しかし大蛇は現れない。疲れた王は巨木の傍らで眠りに落ちた。すると、小石丸が激しく吠え立てる。王はなだめるが、なおも吠え続ける。怒った王は小石丸の首を刎ねてしまう。すると小石丸の首は梢に飛び上がったかとおもうと、何者かと戦う気配がし、やがて大蛇の首に噛みついたまま川に落ちた。小石丸は樹上から王を狙う大蛇に気付き、危機を知らせるために吠え続けていたのだった”

大瀧神社

大蛇ヶ淵

4. 大蛇ヶ淵「大瀧神社」

小石丸と大蛇が闘った場所が、犬上川の大蛇ヶ淵であると伝えらます。ゆったりと流れてきた犬上川が、ここの部分で瀧のような激流となり、再びゆったりとした流れに戻ります。川の流れの大きな変曲点は、水が生まれる聖地であり、多くの場合、ここに神仏が祀られます。大蛇ヶ淵も例外ではなく、大蛇ヶ淵を見おろす崖上に、水の神を祀る「大瀧神社」が鎮座しています。

“小石丸の活躍により大蛇を退治した稲依別王は、小石丸に因んだ「犬上氏」の祖となり、地名も犬上郡となった。そして大瀧神社の傍らの犬上神社に小石丸と共に祀られている。”

5. 犬上

大蛇ヶ淵伝説は、犬上川の開発の歴史を物語っています。川の下流を灌漑するためには、川に堰を造り水を取り、用水路を開削して水を下流に流す。この工事には多くの犠牲が払われたことでしょう。人間に抗し、荒れ狂う川の流れが「大蛇」に擬せられ、川との闘いに払われた犠牲が「小石丸」に投影されているのでしょう。犬上の名は、小石丸が大蛇に噛みついた「犬噛」から生まれたとされていますが、水により豊かな水田が生まれたことを踏まえれば「稲神（いねがみ）」がその語源であり、犬上川は、稲の豊穣をもたらす、蛇神の依り代と考えることができます。

犬上神社

政所若宮八幡の能衣装

4章　愛知川の流れ

鈴鹿の山を源とする最も長く流れる川が愛知川。
愛知川は大きな川ですが、豊かな水を湛える川ではありません。
谷を出ると川水は地に潜り伏流します。
この自然の気まぐれと人々は向き合ってきました。

1. 小さなダム

水は、人の命は無論、全ての生き物たちの命を涵養しています。人は、水が育んだ命を食料として暮らしています。稲作に水が不可欠であることは、言うまでもありません。そのために人は川から水を取り、田にこの水を引きます。

水は決して上には流れません。谷底を流れる水は利用できません。水を引きたい田畑の高さよりも川底が高いところに堰を造り、水を引かなければなりません。貧弱な土木技術では大きな川は御すことができません。しかし、山里では、小さな谷の、小さな流れに、小さなダムを造り水を取り込む暮らしが続いています。

谷に造られた小さなダム

狛井と丁石地蔵

2. 用水がもたらした財「狛井（こまゆ）」

愛知川の左岸一体を蒲生野と呼びます。「野」とは、作物を作りがたい「荒野」のことを指します。野を開発するためには水が不可欠です。しかし、蒲生野には適当な水源がありません。そこで愛知川の水を引くための用水路を開削し、八日市の太郎坊周辺まで水を引き込みました。その取水口は東近江市寺町付近。ここから延々と水を招いたのです。この用水路は「狛井」と呼ばれ、その音からは、渡来人達の活躍も想像したくなります。そして、この用水により莫大な富を得たという「狛長者（こまのちょうじゃ）」伝説もこの地に伝えられています。

3. 伊野部建部神社

愛知川は、永源寺の谷口を出ると俄に水量を減じます。多くの水が伏流してしまうからです。地に潜った水は箕作山の根に当たり、行き場を失い地上に吹き出ます。その最も顕著な場所が「西の澤」です。集落の屋敷地から清冽な水が湧き出、集落を出る頃には既に大きな川となり、下流を灌漑しています。

そしてこの湧水地の上に鎮座しているのが伊野部建部神社です。社伝に拠れば、犬上の稲依別王が、その父である日本武尊を祀ったことに始まるとされています。やはりこの二柱の神は水の開発に関係する神なのでしょうか。

西の澤　屋敷から水が湧き出る

新茂智神社の蛇

4. 国の神へ 毛知比神社・新茂智神社

伊野部建部神社に鎮座した日本武尊、そして稲依別王は、水を介して、その分身を近江各地に分散させます。というよりも、各地に迎えられます。最も象徴的なのは、近江中の水が集まる琵琶湖の水が流れ出る瀬田川の畔に、この神々が迎えられます。大津市田上里町の毛知比神社には日本武尊が、大津市関津町の新茂智神社には稲依別王がそれぞれ鎮座し、瀬田川の流を見つめています。新茂智神社の境内には勧請吊が架けられています。その姿はまるで蛇のよう。水神である蛇との葛藤の思い出がここに伝えられたのでしょうか。

5. 近江一宮「建部大社」

この大和との関わり深い、二柱の神を瀬田川に迎えたのは、恐らく古代の日本という国だったのでしょう。大和を、京を、支える物流の拠点が瀬田川だったからです。そして、近江国府が瀬田丘陵に出現し、その整備が進むと、日本武尊は、近江の国を司る、近江一宮の神として近江国府の近くに迎えられます。建部大社です。

夏の一日、日本武尊は人々を引き連れ、船に乗り瀬田川を下ります。そして、鈴鹿の山から瀬田川に迎えられ鎮座した、毛知比神社・新茂智神社に残した分神と出会い、旧交を温めるための宴に興じます。これが船幸祭です。

船幸祭　神々の宴

5章 日本武尊の分身たち 白鳥の神

伊吹山の神との闘いに敗れ、命ついえた日本武尊の魂は白鳥に変じて飛び去ります。
その後、命の魂が何処に宿ったのかは、歴史は語ってはくれません。
しかし、鈴鹿の恵みを受ける地域には「白鳥」を冠した神社や、川の流れが数多くあります。

御澤神社の龍

1. 御澤神社

東近江市上平木に鎮座する御澤神社の社伝に拠れば“平木の地は水に恵まれない「野」であった。これを哀れんだ聖徳太子が、蘇我馬子に命じて池を掘らせたところ「清水池」「濁池」「白水池」が生まれ、この水を使い平木の地は豊かな農地に生まれ変った。そして、この池を祀るために御澤神社が祀られている”

御澤神社から生まれた水は、御澤川となり下流の水田を潤し「白鳥川」に合流します。白鳥川は佐倉川の水を引き込んだ人工の川で、この水が上平木を灌漑しています。水の開発と白鳥（日本武尊）が重なって見えて来ます。

御澤神社

白水池と三和姫弁才天社

2. 蛇神の池「三和姫伝説」

竜王町川守の龍王寺にはこんな縁起が伝わっています。“奈良時代の事、龍王寺で病の平癒を祈る小野時兼という美青年が居た。ある日、時兼の元に三和姫と名乗る絶世の美女が現れ、何時しか二人は夫婦となった。ある日三和姫は「私は人間ではない。雪野山の向こう、平木の御澤池の主。宿縁によりあなたと結ばれたが、帰らなければならない。もし私に会いたければ御澤池に来なさい。」と告げ、形見の玉手箱を置いて立ち去った。時兼は三和姫に逢いたく、御澤池の畔に立ち、三和姫を呼ぶと、三和姫は10丈(約29m）の大蛇となって現れた。”

3. 三和姫 大蛇の化身

御澤池の主は絶世の美女であり、その正体は大蛇であると語られます。蛇は水の神、即ち水を生み出す神ですから、女性神でも問題はありません。先に見た伊吹山・犬上川の大蛇は「荒ぶる」姿から「男性神」をイメージしますが、女性神でも構わない、むしろ生み出す力を考えれば女性神の方が相応しくも思えます。円空は、伊吹の水の神を優しき十一面観音の姿で表現しました。三和姫は、御澤池の内、白く濁る白水池に「三和姫弁財天」として祀られています。この水が白く濁っているのは、三和姫の白粉が溶けているからなのだそうです。

三和姫（龍王寺蔵）

上二俣町白鳥若宮神社の勧請吊

4. 蛇砂川と白鳥神社

御澤池の北東に広がる布引丘陵。その北を蛇砂川が流れています。この川は唐突に始まり、溜池からの排水などを集め、太さを増したり、減じたりしながら、蒲生野の中を複雑に流れ、最後は西の湖に入る、人工的に整備された印象の強い川です。この蛇砂川の流域には何故か、彼の日本武尊を祀る白鳥神社が集中します。池之脇町白鳥神社・上二俣町白鳥若宮神社・市原野白鳥神社・高木白鳥神社・石谷白鳥神社・如来白鳥若宮神社です。非常に際立った神社の整列です。蛇砂川水利の整備と、水の開発神的日本武尊が結びついたのでしょうか。

5. 白鳥神社と勧請吊

勧請吊とは、湖東・湖南を中心とした古い集落に良く見られる呪物で、集落の出入り口や神社の境内に架けられる、一種の注連縄で、多くは、邪悪なもの侵入を防ぐ結界と解されます。

蛇砂川に沿って整列する白鳥神社には何れも勧請吊が架けられます。いや、蛇砂川の流域の多くの神社に環境吊が架けられているのを目にします。そして、主縄の尾と頭を明確に造り分ける場合が多く、その形状はまるで「蛇」。また、市原野や如来の白鳥神社では、主縄の上に小蛇を象ったとしか想えない御幣を立てています。勧請吊りは水を司る蛇への祈りに想えます。

市原野白鳥神社

6章 日野川の流れ

鈴鹿山系の竜王山・綿向山・水無山に発した水は、
佐倉川・日野川となり流れ、
やがて佐倉川は日野川に合わさります。
そして竜王山(雪野山)と竜王山(鏡山)に宿る
龍神の視線に見護られ、琵琶湖に至ります。

日野川が生まれる（熊野大瀧）

1. 三和姫の鐘「龍王寺」

三和姫伝説には後日談があります。“大蛇となって現れた三和姫の姿に驚いた時兼は、三和姫が残した玉手箱を約束の百日を待たずに開けてしまう。すると、中から梵鐘が現れた。旱天の時、この梵鐘を打ち鳴らすと必ず雨が降る” 梵鐘に雨を降らせる力はありません。雨を降らせるのは梵鐘に宿った三和姫(蛇)の力で、その音は三和姫が発する雷鳴に他なりません。

この霊鐘は、今も龍神池の畔に建てられた「龍壽鐘殿」に神として祀られています。この龍神池は何時も白く濁っています。三和姫の住む御澤池と繋がっているから、なのだそうです。

三和姫の鐘

龍神の磐座

2. 竜王山(雪野山・鏡山)

美蛇神の三和姫(東近江市上平木)と、小野時兼(竜王町川守)との間に聳える山が雪野山です。別名竜王山。山は二人を隔てているように見えますが、山頂に宿る神の視点に立てば、両者は共に神の視線の元にある者達、となります。時兼の打ち鳴らす鐘の音に感応して、三和姫は御澤池の水を巻き上げ、これを受けた山の神が雨を降らせる。正に竜王山です。

一方、日野川の南に聳える山並が鏡山です。別名竜王山。山頂には祈りに感応して雨をもたらす龍神の磐座が祀られています。この二つの竜王山に護られた竜神の里が「竜王町」です。

3. 蛇と弓「岡屋勝手神社」

鏡山(竜王山)の北麓を流れる川が祖父川です。小さな川ですが、山裾に造られた溜池から水田に入り、稲を育てた水を集め、さらに用水を供給し、やがて日野川に合流する、沿岸の耕作を支える大切な川です。この川沿いには、川水に依拠した古い集落が立地し、集落を護る鎮守の神々もまた川沿いに整列します。

これらの鎮守に共通する祀りに「勧請吊」があります。蛇砂川沿いの神社と同じように、川沿いの神社の多くに勧請吊が架けられているのです。岡屋勝手神社では、縄の中央に「弓」が掲げられ、山を狙っています。

岡谷勝手神社勧請吊の弓

熊野神社

4. 水源を護る村「熊野神社」

日野川本流の水源は鈴鹿山地の水無山です。この山の麓のかくれ里が、日野町熊野で、この鎮守が熊野神社です。この社名のようにかつては、綿向山系を熊野山系になぞらえた「修験道」の中心で、熊野那智大瀧になぞらえた熊野大瀧を奥の院としています。

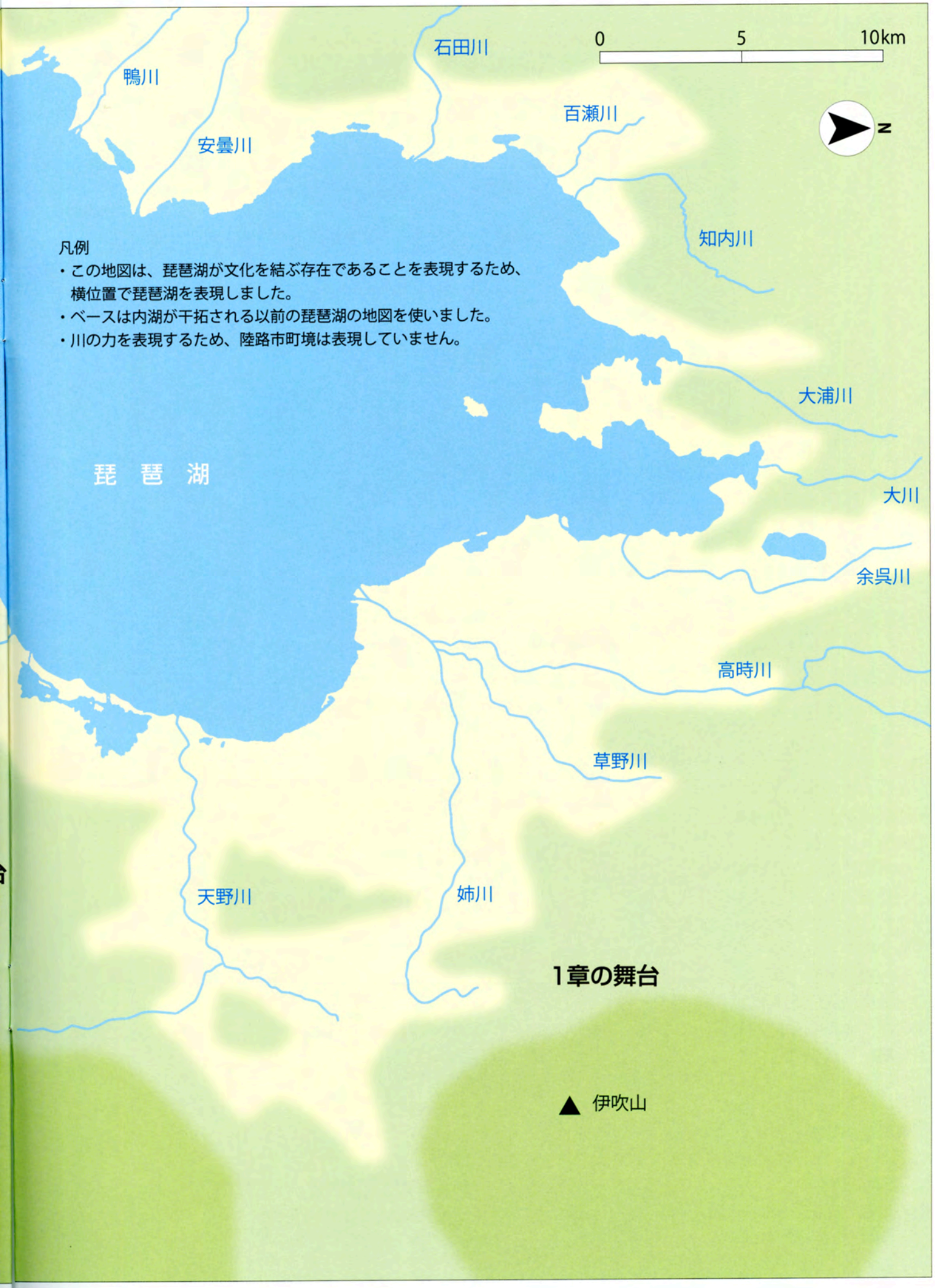
神社境内には大きな勧請吊りが掲げられ、その奥の高まりにも勧請吊りが渡されています。この高まりを「おろち塚」と呼んでいます。その名は、“昔、たたりをなした大蛇がおり、これを退治したとき、その首を埋めた塚”と、言い伝えられています。またしても大蛇です。

5. 大蛇の復活「お祈り」

小正月の頃、熊野神社では「お祈り」と言う行事が行われます。村の若者が神社拝殿前から「おろち塚」に立てられた的に向い、次々に弓矢を放つ行事です。これは、禍をなす大蛇を退治した様子の再現と説明されます。矢は、武器であると同時に上賀茂神社の縁起に象徴されるように「命を宿す呪物」です。“冬、自然の神の力が最も衰える時期、神の元から放たれた矢は、地に眠る大蛇に向かい、活力を注入し、来るべき春に向けて、その力の復活を願う”そんな意味の込められた行事が「お祈り」と考えられます。蛇神との交渉はこれからも続きます。

熊野神社「お祈り」

琵琶湖に集う川(蛇)
野洲川
祖父川
日野川
白鳥川
5章の舞台
6章の舞台
蛇砂川
5章の舞台
愛知川
4章の舞台
宇曽川
犬上川
芹川
2章の舞台
3章の舞台
鈴鹿の山並


0
5
10km
N
石田川
鴨川
百瀬川
安曇川
知内川
凡例
・この地図は、琵琶湖が文化を結ぶ存在であることを表現するため、
横位置で琵琶湖を表現しました。
・ベースは内湖が干拓される以前の琵琶湖の地図を使いました。
・川の力を表現するため、陸路市町境は表現していません。
大浦川
琵 琶 湖
大川
余呉川
高時川
草野川
天野川
姉川
1章の舞台
伊吹山

鈴鹿山麓混成博物館

鈴鹿山麓にある博物館が中心となり、様々な機関と連携しながら、
歴史文化遺産を社会資源として活用することを目的に、2018年に結成された団体です。

〈構成団体〉

東近江市博物館　（能登川博物館・近江商人博物館・中路融人記念館・西堀榮三郎記念探検の殿堂）
愛荘町立歴史文化博物館
多賀町立博物館
一般社団法人東近江市観光協会
一般社団法人愛荘町愛知川観光協会
一般社団法人愛荘町秦荘観光協会
一般社団法人多賀観光協会
竜王町観光協会
一般社団法人近江八幡観光物産協会
琵琶湖汽船株式会社
滋賀第一交通株式会社

〈事務局〉
多賀町立博物館
〒522-0314　滋賀県犬上郡多賀町四手976-2
tel. 0749-48-2077
e-mail　museum@town.taga.lg.jp

〈発行〉
2019年3月

〈発行・監修〉
鈴鹿山麓混成博物館

〈制作〉
鈴鹿山麓混成博物館
NPO法人歴史資源開発機構

文化庁　この冊子は「平成30年度文化芸術費補助金「地域と協働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」の採択を受けて制作しました。